

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

第6回 木造モダニズムのユートピア： 八幡浜市立日土小学校

花田佳明（神戸芸術工科大学教授）

はじめに

愛媛県八幡浜市。九州に向かって突き出した佐多岬半島の根本にある港町だ。その中心部から北へ数キロ。「耕して天にいたる」と言われるほどの段々畑が山全体を覆っている。それらに囲まれた谷筋を流れる喜木川に沿って、八幡浜市立日土ひづち小学校は建っている。

この校舎は、同市の職員であった建築家・松村正恒（1913-93年）の設計により、1956年から58年にかけて完成した。卓越した建築計画がなされると同時に、詩情溢れるたたずまいも印象的で、建築研究者と建築ジャーナリズム双方から高く評価された。また松村自身も、1960年5月号の『文藝春秋』によって、村野藤吾、前川國男、丹下健三らとともに日本を代表する10人の建築家のひとりに選ばれ、その名は広く知られるところとなった。

しかし時間の経過とともに学校建築の潮流も変化し、日土小学校について語られる機会は減り、また松村も、1960年に市役所を辞めて松山市に設計事務所を開設したが、建築ジャーナリズムの関心を引くような作品は少なく、次第に建築界の最前線から消えていった。

ところが1990年代にはいり、モダニズム建築再評価の動きが高まり、松村に関する研究が始まっていく¹⁾。そして日土小学校は、1999年、DOCOMOMO Japanによって日本を代表する20のモダニズム建築のひとつに選ばれた。さらに保存運動も展開されて2009年6月に保存再生工事が完了し、今も小学校として使い続けられている。

私は1994年に初めて松村建築を見て以来、松村正恒に関する研究に携わり²⁾、日土小学校の保存再生活動にも深く関わってきた。そういう立場から、日土小学校、松村正恒、そして日土小学校の保存再生の概要を紹介したい。

日土小学校の価値

日土小学校は、切妻屋根の木造2階建て、明るいペンキ塗りの外壁に水平連続窓が走る軽快な印象の建物だ。保存再生工事の中で竣工時の多彩な色彩計画が明らかになり、清楚な中にも華やかさの漂うたたずまいが復元された。

運動場から見て右側が中校舎（1956年竣工）で左側が東校舎（1958年竣工）である。前者には、職員室・工作室・音楽室・2つの普通教室、後者には6つの普通教室や便所があった。

日土小学校には、いくつもの建築的な特徴がある。

まずは、教室と廊下を分離し、2教室を単位として枝状の前室で廊下につないだクラスター型教室配置だ。この配置計画により、落ち着いた学習環境が実現するとともに、廊下側と運動場側の双方から教室に光と風



日土小学校の竣工直後の全景（松村家蔵）。左が東校舎、右が中校舎。

を取り入れる両面採光も実現した。教室に照明設備がなかった戦後間もなくの時期において、それはきわめて切実な建築的解答だった。

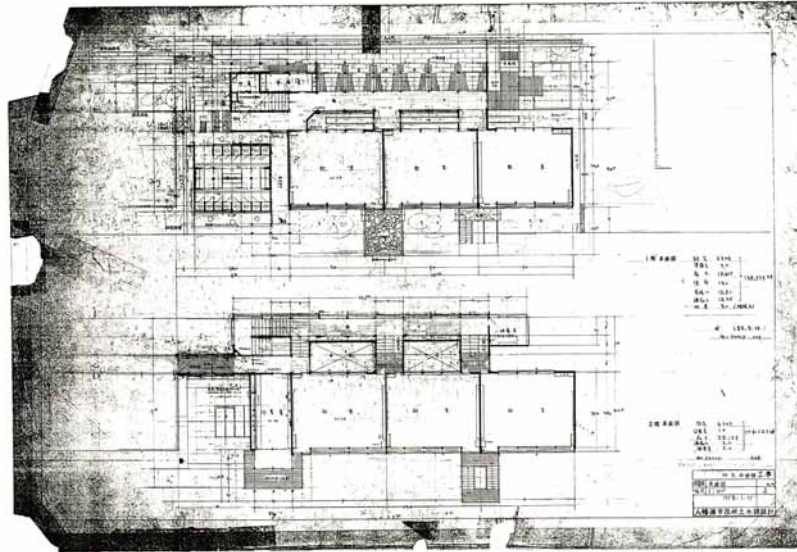
クラスター型教室配置については、当時、東京大学吉武研究室を中心に研究や実作が試みられていた。しかし、それらは概念的な図式の建築化に留まっていたと言わざるを得ないほど、日土小学校に出現した空間は完成されていた。

木造とスチールを組み合わせたハイブリッドな構造形式も効果的に使われている。たとえば東校舎においては、丸鋼ブレースで水平力に抗することにより川側の外壁をカーテンウォール化し、開放的な外観と教室空間を実現した。

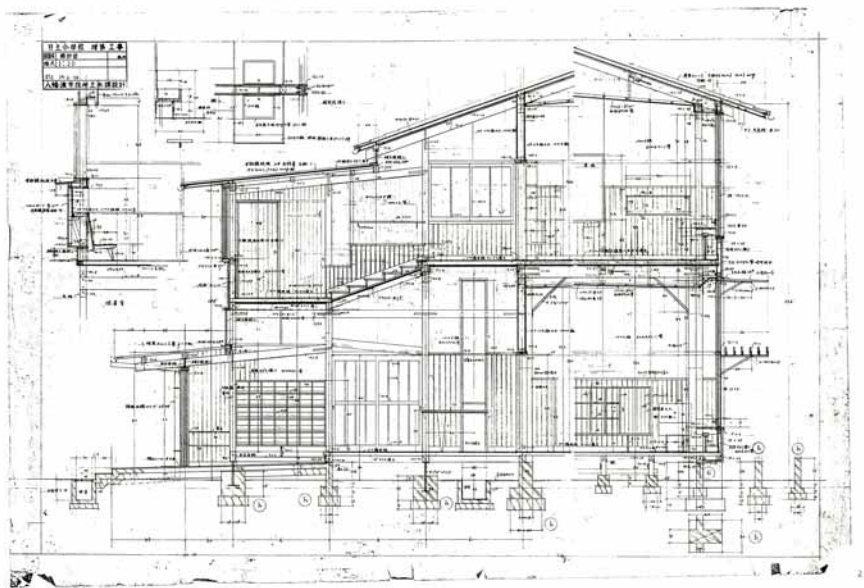
さらに、階段、廊下、図書室、川側のテラスや外部階段などのデザインは、細部に至るまで考え抜かれており、現代においてすら類を見ない豊かさをもっている。学校内のすべての空間が、子どもたちのための心地よい居場所なのだ。

内部はどこも柱と梁の明快な軸組やガラス面で構成され、理知的で透明感溢れる空間である。しかも、機能性と普遍性を重視したモダニズム建築でありながら、優しい抒情性をたたえている。面取りを施された柱や梁が、抽象化をめざした近代的造形とは異なる柔らかな質感を生み出すからだ。

しかし、こういった建築的な語彙や構成に、特定の建築思潮に縛られた形跡



日土小学校東校舎平面図（八幡浜市役所蔵）。廊下と教室が切り離されている様子がよくわかる。



日土小学校東校舎矩計図(八幡浜市役所蔵)。廊下と教室の細やかなデザイン、教室の川側外壁がカーテンウォールになっていることなどがよくわかる。

はない。八幡浜市役所における松村の作品の多くは木造を基本とし、デザインの傾向はモダニズム建築に拠っている。しかしそれらを丹念に分析すれば、建築計画・意匠・構造・環境工学といったさまざまな領域の知識や技術を使いこなし、一作ごとにデザインを進化させながら、彼が自らの学校観や建築観をた

だひたすら空間化した結果であることがよくわかる。つまり、外的な文脈に頼ることなく自らの思考の内部でひとつの世界制作をおこなったのだ。

日土小学校はそのような設計方法による建築の完成形であり、まさに木造モダニズムのユートピアとでも呼ぶべき空間なのである。

松村正恒という建築家

松村正恒は、1913年1月12日、現在の愛媛県大洲市新谷町の旧家に生まれた。2歳で父親と死別し、やや寂しい幼年時代を送っている。

1932年に武蔵高等工科学学校（現・東京都市大学）を卒業し、恩師・蔵田周忠の勧めにより土浦亀城建築設計事務所就職した。そこでは、もっぱら資産家のためのいわゆる「白い家」としてのモダニズム建築の設計に携わり、1939年からは満州に移転した土浦事務所で植民地生活も経験した。

一方、国内外の最新の建築計画学的知識を独学し、編集者・小山正和の知遇を得て『国際建築』で海外文献の翻訳に携わり、さらに弱者救済の社会活動に参加するなど、自分の道を探る努力も重ねている。そして、1941年には土浦事務所を辞して農地開発営団へ移り、竹内芳太郎らの指導のもとで貧しい農村の住宅調査に従事した。こうした戦前の経験や学習はすべて、戦後における八幡浜市役所での活動の糧となった。

終戦とともに故郷の大洲市へ戻り、1947年に八幡浜市役所の職員となって土木課建築係に勤務した。

市役所での活躍はめざましく、1960年9月に退職するまでの約13年間に、



東校舎1階の教室。カーテンウォール形式の外壁の構成がよくわかる（松村家蔵）。



東校舎1階昇降口から教室への前室まわりの様子（撮影：花田佳明）。透明感溢れる構成である。

多くの秀れた学校建築や病院関連施設などを設計した。建築雑誌や『建築学大系』などの書物に作品が紹介され、1960年には、すでに述べたように、『文藝春秋』によって日本を代表する10人の建築家のひとりに選ばれた。

松村は、社会正義と反骨精神に満ちた人物であり、旧態依然とした教育委員会や市議会などと闘ったエピソードが残っている。また彼は、教育や福祉の充実をめざした名市長・菊池清治に支えられた。民主化された戦後社会のあるべき姿を共有した首長と建築家の幸福な出会いがあったのだ。

その後松村は、1960年に八幡浜市役所を辞して松山市に設計事務所を開設した。1993年に亡くなる直前まで現役を貫き、大小合わせて約400もの建物を設計した。書や狂言を愛し、近代建築の保存運動にも尽力した。機会あるごとに発せられた自在な言葉や文章は、建築あるいは建築家のあるべき姿についての儒教的ともいえる厳しい批評でもあった³⁾。

しかし、この間に彼が設計した建物には日土小学校のような先鋭性はなく、市中のアノニマスなデザインと思えるものが多い。そのことの解釈は難しいが、作家性の強い建築や建築家に対する批判的な思いが松村の中にあったことは間違いない。建築ジャーナリストで評論家の宮内嘉久によるインタビューに対し、税金でつくる公共建築では可能な限りの実験をしたが、独立後の民間の仕事では冒険はしにくいという主旨のことを答えており⁴⁾、胸中複雑なものがあったに違いない。

戦後、地方都市に留まり自らの信念に従って設計に生きた松村の人生は、既に述べたユートピア的な世界制作という設計手法とも重なってくる。その完結性が、市役所時代には革新的な建築を生む原動力となり、独立後はやや自閉的な発言へと彼を導いてしまったのではでないだろうか。

保存再生された日土小学校

1990年代には、松村が市役所時代に設計した木造建築の多くは解体の危機に瀕していた。そして関係者の間には、日土小学校だけはなんとか保存したいという思いが募っていた。

そこで、1999年に日本建築学会四国支部の50周年記念として、松村の設計した八幡浜市立江戸岡小学校で松村に関するシンポジウムを開催した。これを機に関係者のネットワークが生まれ、日土小学校の保存活動が本格化した。



保存再生工事の終わった日土小学校（日本建築学会四国支部提供 撮影：北村徹）。

その後、「夏の建築学校」と称した八幡浜での勉強会、各種シンポジウムなどをおこない、日土小学校の価値を訴えた。そして紆余曲折はあったが⁵⁾、八幡浜市から日本建築学会に現状調査と改修計画案の策定が委託され、そこでまとめられた内容に基づいた保存再生工事によって、2009年6月、日土小学校は歴史的価値と現代的な機能を両立させた小学校として甦った⁶⁾。

おわりに

日土小学校の保存再生に携わった私にとって最大の喜びは、その一連の作業すべてが、松村との架空の対話を通じた設計作業に思えたことであった。つまり、彼の思考を継承しながら、日土小学校という建築の設計作業の続きを50年後におこなったと実感できたのである。

そのような感覚を抱くことができたのは、松村の思考が作家性の強い個人的なものではなく、他者とのコミュニケーションが可能な論理的でしかも原理的なものであったからだ。私には、そのような建築言語の様相には、これからの建築を考えていく上でのヒントがあると思えてならない。

註

- 1) 花田佳明「松村正恒の残したもの」『再読／日本のモダンアーキテクチャー』（彰国社、1997年）、『SD』2000年9月号（特集・木造モダニズム 1930s-1950s）等。
- 2) その成果は『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』（花田佳明、鹿島出版会、2011年）にまとめた。
- 3) 『老建築家の歩んだ道』（発行者：松村妙子、1995年）に松村の多くの文章や講演などが収録されている。
- 4) 『素描・松村正恒』（宮内嘉久編集事務所編、建築家会館、1992年）。
- 5) 花田佳明「日土小学校の保存活動の現状について」『建築雑誌』2008年2月号
- 6) 甦った姿は『新建築』2009年11月号などに掲載された。保存再生工事の詳細は『八幡浜市立日土小学校保存再生工事報告書』（日本建築学会四国支部日土小学校保存再生特別委員会編、八幡浜市教育委員会、2010年）。